

覚鑊における不動明王説話の系譜

郭 佳 寧

キーワード…覚鑊 不動明王 『撰集抄』 根来

はじめに

興教大師覚鑊（一〇九五～一一四三）は、真言密教中興の祖、また新義真言の祖として仰がれている。覚鑊は当時の王権の頂点にある鳥羽院の帰依を受け、高野山において真言密教の伝法会を復興し、大伝法院（鳥羽院御願寺）を建立した。しかし、大伝法院の建立、及び寺院組織の本格的な確立とともに、高野山本来の組織である金剛峯寺との間に相論と騒動が生じた。そのため、晩年の覚鑊は高野から離山し、根来に移住した。覚鑊が亡くなった後も、金剛峯寺と大伝法院の間には長期間にわたり軋轢が生じ続けた。その結果、根来を拠点とした大伝法院門徒の側では新義を打ち立て、真言宗は古義と新義に分裂することとなった。覚鑊は自らの本意ではないにもかかわらず、新義真言の祖師として後の門弟たちに仰がれるようになった。覚鑊の生涯を大きく区分すると、

高野山大伝法院造営・伝法会復興の時期と根来における晩年期に分けられる。

覚鑊が自らの宗教活動の拠点を高野山より根来に移転することは、『覚鑊聖人伝法会談義打聞集』^①や根来における豊福寺・神宮寺などの造営記録から確認できるが、移住のきっかけについて最初に語った説話集は『撰集抄』^②である。『撰集抄』における覚鑊の高野離山は不動明王と関連するものとして語られている。覚鑊は高野山の伝法院において弘法大師空海の跡をつぎ、入定しようとする際、金剛峯寺の僧たちが覚鑊の僧坊を攻めた。しかし、覚鑊はおらず、不動明王が二体あった。一体は覚鑊が化現したものだということ、僧たちが切りつける、覚鑊は定より覚めて切りつけられた。その後、覚鑊は高野山を離れ、根来に移住した。『撰集抄』において覚鑊の不動明王化現とともに語られたのは覚鑊の高野離

山である。即ち覚鑿の根来移住の直接なきっかけは入定中（不動明王化現）に襲撃を受けたことである。そうして、覚鑿をめぐる不動明王説話は単なる不動明王の靈験譚のみではなく、法流の移転を考える際に無視できない問題でもある。

覚鑿における不動明王化現の説話は、既に先行研究によって紹介されたが、主な研究は金剛峯寺による大伝法院への襲撃事件に注目し、説話の創作と史実の相違を考察し、高野山上における金剛峯寺と大伝法院の葛藤を整理するものである。しかし、それらは金剛峯寺と大伝法院という二項対立の軸にそって論ずるものであり、各々の説話における覚鑿に対する評価を焦点に当て検討するものであった。作品における不動明王化現説話そのものの成立、創作意図及び展開、さらに相互の関連性がまだ明確ではない。本稿では、覚鑿の根来移住とともに語られた不動明王化現説話がどのように成立し、またどのような展開を遂げたのかを考察する。更に中世に流布していた覚鑿に関する記憶の系譜を整理する。

一、覚鑿の根来移住と不動明王化現

周知のように、覚鑿が高野山において大伝法院を建立して以来、金剛峯寺と大伝法院の間に所領や座主問題な

どをめぐる争いが起こりつつあった。当時の高野山における金剛峯寺と大伝法院の状況について次の【表1】から確認したい。

【表1】

座主職をめぐる相論		座次をめぐる相論		寺院組織の成立	
長承元年（一一三二）十月	高野山大伝法院落慶供養	長承元年（一一三二）四月	覚鑿無言行始末、影殿より出て、伝法堂に出仕する旨が流される。	長承三年（一一三三）五月	大伝法院、密院院の両寺座主職を覚鑿の補任すべしと定むる。太政官符が下され
長承二年（一一三三）六月	金剛峯寺の山體、聖人寺等、差番起請し、大伝法院に控訴する旨を覚鑿に密に知らせる。	長承三年（一一三三）四月	覚鑿、密院に控訴し、無言行を始め、大伝法院に控訴する旨を覚鑿に密に知らせる。	長承三年（一一三三）六月	金剛峯寺の山體、聖人寺等、差番起請し、大伝法院に控訴する旨を覚鑿に密に知らせる。
長承三年（一一三三）四月	大伝法院座主に金剛峯寺座主職を密に知らせる。	長承四年（一一三三）二月	覚鑿、大伝法院、金剛峯寺両寺座主職を密に知らせる。	長承三年（一一三三）四月	大伝法院座主に金剛峯寺座主職を密に知らせる。
長承四年（一一三三）二月	覚鑿、大伝法院、金剛峯寺両寺座主職を密に知らせる。	長承四年（一一三三）二月	覚鑿、大伝法院、金剛峯寺両寺座主職を密に知らせる。	長承四年（一一三三）二月	覚鑿、大伝法院、金剛峯寺両寺座主職を密に知らせる。
長承二年（一一三三）三月	東寺の密院十人、阿闍梨に補任されることとなる。	長承二年（一一三三）五月	定座、覚鑿の故郷をもつて東寺長者ならしむる旨を密に知らせる。	長承二年（一一三三）三月	東寺の密院十人、阿闍梨に補任されることとなる。
長承二年（一一三三）六月	密院の僧侶の釈えにより、長者、金剛峯寺座主に選請し、高峯を金剛峯寺に譲渡する旨を密に知らせる。	長承二年（一一三三）六月	密院の僧侶の釈えにより、長者、金剛峯寺座主に選請し、高峯を金剛峯寺に譲渡する旨を密に知らせる。	長承二年（一一三三）六月	密院の僧侶の釈えにより、長者、金剛峯寺座主に選請し、高峯を金剛峯寺に譲渡する旨を密に知らせる。
長承二年（一一三三）十一月	密院の僧侶の釈えにより、長者、金剛峯寺座主に選請し、高峯を金剛峯寺に譲渡する旨を密に知らせる。	長承二年（一一三三）十一月	密院の僧侶の釈えにより、長者、金剛峯寺座主に選請し、高峯を金剛峯寺に譲渡する旨を密に知らせる。	長承二年（一一三三）十一月	密院の僧侶の釈えにより、長者、金剛峯寺座主に選請し、高峯を金剛峯寺に譲渡する旨を密に知らせる。
長承五年（一一三三）春	覚鑿、密院に控訴し、無言行を始め、大伝法院に控訴する旨を覚鑿に密に知らせる。	長承五年（一一三三）春	覚鑿、密院に控訴し、無言行を始め、大伝法院に控訴する旨を覚鑿に密に知らせる。	長承五年（一一三三）春	覚鑿、密院に控訴し、無言行を始め、大伝法院に控訴する旨を覚鑿に密に知らせる。
長承五年（一一三三）四月	覚鑿、密院に控訴し、無言行を始め、大伝法院に控訴する旨を覚鑿に密に知らせる。	長承五年（一一三三）四月	覚鑿、密院に控訴し、無言行を始め、大伝法院に控訴する旨を覚鑿に密に知らせる。	長承五年（一一三三）四月	覚鑿、密院に控訴し、無言行を始め、大伝法院に控訴する旨を覚鑿に密に知らせる。

長承元年（一一三二）十月、鳥羽院の御幸を迎えて大伝法院の落慶供養が行われ、そして長承三年（一一三四）五月に鳥羽院の院宣が下された。院宣により、大伝法院及び密院の座主相承、所司と定額僧の補任が定められ、

大伝法院の寺院組織が院宣によって正式に確立された。しかし、僧侶の座次問題をめぐって高野山本来の金剛峯寺と大伝法院の間に相論が起きてしまった。一方、大伝法院・金剛峯寺両寺の座主職を兼任する覚鑿は自ら修行のため、長承四年（一一三五）一月、密厳院において籠居の準備をはじめ、両寺の座主職を真誉に譲った。覚鑿が俗務から離れて修行に専念することにしたにもかかわらず、高野山上において座次問題のほか、金剛峯寺座主職をめぐる相論も絶えなかった。そのような状況のなか、修行中の覚鑿をめぐる噂が流されていた。そのことについて、覚鑿の弟子である兼海が覚鑿の籠居を記した「**ま上人事**」⁶において詳しく語っている。

乙卯歲師久定之歳

長承四年正月一日、於密厳院上院捨縁務始無言。我大師籠居、但三月廿一日已前者、是令調座禅縁具之間也。三月廿一日、固不通一切、偏修即身成仏之密行。常随給事人、龍玄并兼海也。（中略）其間両度雖有院宣、不申通之。保延五年、春、凶徒成怨嫉云、上人既逝去、而弟子僧兼海等、妄構在生之由也。即弘此由於天下、号為見顔、廻殺害之謀、頻發大衆、擬乱入。（中略）四月二日結願無言、始出法音、演真言秘奥深義、聴衆數百、悉流隨

喜之淚¹。

兼海の「**ま上人事**」によると、覚鑿が長承四年（一一三五）から密厳院において籠居し始め、即身成仏のための修行が行われた。しかし、保延五年（一一三九）の春、金剛峯寺衆徒の間に覚鑿上人が既に死去し、弟子たちは上人がまた生きていることを演じているだけだという噂が流されていた。更に、金剛峯寺の衆徒が上人と対面することを望むということを口実にし、実は殺害することを企んでいた。「頻發大衆、擬乱入」とあるように、覚鑿が修行中に金剛峯寺の衆徒より妨害を受けたことが明らかである。その後、保延五年（一一三九）四月二日、覚鑿は修行を結願して密厳院より出て、伝法会に出仕した。「**ま上人事**」は覚鑿に給仕する弟子兼海の記録であり、覚鑿を巡る当時の状況をよくあらわしている。一方、「**ま上人事**」に記された修行中の覚鑿が妨害を受けたことに関して、後に成立した『靈瑞縁起』⁷という根来豊福寺の覚満が編纂した大伝法院の縁起においては次のように語られている。

保延三四五六年、偏密厳院坐禅之間、寺僧猶成不審。何況比寺凶徒、既入定歟之由、頻令二嫉妬云。人魔競起仏閣不静。因茲偷出伝法院、屢入根来寺、即伝法院寺役等、所被移修根

来寺^一也。

『靈瑞縁起』では、保延三年（一一三七）から保延六年（一一四〇）にかけて、覺鑊は密嚴院において坐禪（籠居）した間、金剛峯寺の衆徒は覺鑊の坐禪に不審を覚え、覺鑊は既に入定したとし、頻りに邪魔をした。妨害された覺鑊は高野山から根来へ移住した。『靈瑞縁起』では、「ま上人事」と同様に、密嚴院における覺鑊の修行を取り上げ、それをめぐって金剛峯寺衆徒による覺鑊死去の噂が流され、覺鑊の修行を邪魔しようとする行動を起こした。一方、「ま上人事」の記述と比べると、『靈瑞縁起』では、密嚴院坐禪中に起きた金剛峯寺による騒動は、覺鑊の高野離山、或いは高野山における大伝法院の寺役を根来に移したきっかけとして語られている。それについて、根来側の状況と合わせて後述するが、ここでは正応五年（一二九二）に成立した『靈瑞縁起』において寺役移転が記述されることをまず確認した。

ところが、「ま上人事」と『靈瑞縁起』では、金剛峯寺による騒動のなかで不動明王が登場せず、覺鑊自身が直接襲撃を受けたかどうかについても語っていない。籠居中の覺鑊が金剛峯寺衆徒の襲撃を受けたことを初めて記したのは『選集抄』である。『撰集抄』「覺鑊事」では、覺鑊をめぐっていくつかのエピソードが記される。その

内容からみると①覺鑊の入定と金剛峯寺側の襲撃、②白河院は生身の阿弥陀である覺鑊を拜むという二つの部分によって構成されている。覺鑊の籠居及び金剛峯寺による襲撃事件については次のように語っている⁸。

近比、高野の御山に、覺鑊聖人とてやんことなき聖おはしけり。真言宗を悟きはめて（中略）弘法大師の昔のあとを問て、伝法院といふ所を立、龍花三会の暁を待て、入定し給へりけるとかや。時の人あさみあへるわざ、なのめにも過たり。（中略）

か、るまゝに、本寺僧徒、あつまりて各議する様、「我朝六十余州には、大師の外誰の人か定に入れるはある。中にも、世下て、我山にいかなる行徳ある者なりとも、争か大師の御まねをしては侍るべき。いざ、伝法院へよせて、かの覺鑊が入定さまさん」と議して、俄に寄にけり。（中略）本寺の僧、入定の所に乱入て見るに、不動尊二鉢おはしましけり。

一鉢は、覺鑊の日比の本尊の不動におはします。今一は、聖の化したるとおほゆ。但、いづれとみわきがたし。いかゞすべきとためらひけるに、或僧の不動をさぐり奉りければ、少あた、かにおはしければ、「是こそ覺鑊よ」とて、太刀にて切けれども、つゆされざりけるを、なじかはとて、いたく切ほどに、

覺鑊、定さめて、つゝにきられ給へり。かゝりければ、人々、谷へはね入て歸りにけり。其後、覺鑊、「こは、心にもまかせぬわざ哉。我この所に住まじ」とて、根来と云所に庵を結ておはしけるが、七十二といひける三月三日、往生の素懷をとげ給へり。空に寒聞え、地に花ふりて、誠に目出て終をとり給へりとなん。(中略)

然上は、此聖人の、大師のまねして、定に入るは、誰々も悦ぶべきに、是をそばめけむ心、返々おそろしくぞ侍る。

『撰集抄』では、まず「真言宗を悟きはめて」・「時の人あさみあへるわざ、なのめにも過たり。」とあるように、真言密教の教えを極め、人々より篤く帰依される聖人として覺鑊を讃える。また、覺鑊は龍花三会の暁を待ち、定に入ったことを示している。そして次のところに、覺鑊の入定をめぐって事が急に騒がしくなることが語られる。金剛峯寺(本寺)の衆徒は覺鑊の入定が空海の真似であるため許されないこととし、覺鑊のところへ押し寄せた。しかし乱入したところ、覺鑊はおらず不動明王が二体あった。一体は覺鑊日頃の本尊であり、もう一体は覺鑊が化現したものと思われる。どちらが覺鑊であるか見分けがつかないところ、ある僧は不動明王を触り、

少し暖かい像が覺鑊であると信じ、太刀で像を刻み始めたが、切れなつたため強く切りつけた。そうなると、覺鑊は定からさめ、終に切られてしまった。その後、覺鑊は高野山では素懷を叶えられないことを嘆き、根来に庵を結び、かねてから往生の素懷を遂げた。覺鑊に対する金剛峯寺の襲撃の話はここでいったん終わるが、その後『撰集抄』の撰者は事件について自らの評価を加えた。覺鑊上人が弘法大師の真似をして入定することは、誰もが悦ぶべきことであり、それに背くことはなんと恐ろしいことだという金剛峯寺僧徒に対する批判がみられる。

『撰集抄』における覺鑊の不動明王化現説話は、その直接の典拠は不明であるが、恐らく「**上人**」に記されたような、密厳院籠居中の覺鑊をめぐる死去の噂と金剛峯寺側の騒動による伝承が土台となっているであろう。『撰集抄』において、覺鑊は弘法大師と同じ、弥勒菩薩の龍花三会を待ち入定し、その入定中に金剛峯寺側による襲撃を受けたことが語られている。「**上人**」及び『靈瑞縁起』と比べると、『撰集抄』では、覺鑊が直接襲撃を受けたことを記しており、またその襲撃を受けたのは不動明王に化現した覺鑊であると示した。それに『撰集抄』ではその襲撃事件が覺鑊の高野離山のきっかけとして位置付けられる。更に、根来に移った覺鑊が

往生の願いを遂げたことが意識的に取り上げられている。「往生の素懐をとげ給へり。空に楽聞え、地に花ふりて、誠に目出て終をとり給へりとなん」とあるように、『撰集抄』におけるこの話は、覚鑿の往生伝として語られるものであろう。即ち、『撰集抄』に記述される不動明王化現説話は、覚鑿の高野離山と根来往生を引き出すためのものとして理解できるだろう。また、『撰集抄』は覚鑿の入定を称賛し、その入定に反発する金剛峯寺衆徒の乱暴が「返々おそろしくぞ侍る」と表現する。『撰集抄』は金剛峯寺と大伝法院の対立を意識しながら、覚鑿と根来を讃える立場からこの話を取り上げたのだろう。一方、そのような覚鑿と不動明王の話は、中世前期において『撰集抄』のほか『元亨釈書』もそれについて言及した。『元亨釈書』「伝法院覚鑿」という覚鑿の伝において虎関師鍊による次のような賛が付される。

賛曰、世言、鑿營^二伝法新院^一、贏^二于本寺^一、寺徒
嫌^レ之。覃^二鑿之入定^一欲^レ擯^レ之。蓋嫉^レ配^二始祖^一也。
鑿元持^二不動尊^一、寺徒鼓噪入^二鑿房^一。不^レ見^レ鑿、
只不動之^二像在焉^一。胥議曰、其一像必鑿也。百計攻
治、遂受^二狼狽^一。今考^二鑿事^一無^レ之、豈其徒諱而不
レ書邪、殊不^レ知、是鑿之奇事也。惜乎、鑿也能入^二
仏界^一、不^レ能^レ入^二魔界^一也。然中世以来、如^二鑿之

比^一鮮矣。可^レ謂^二觀成闍梨^一乎哉。

右の賛では、金剛峯寺の衆徒が覚鑿を襲撃する事件について極めて簡略に記しており、『撰集抄』とほぼ同じ内容である。また、『元亨釈書』では「鑿元持不動尊」という、覚鑿における不動明王信仰に触れている。一方、覚鑿の根来移住と往生については言及されない。その賛からみると、虎関師鍊は、覚鑿が不動明王に化現するという不思議こそ最も賛嘆すべきものと認識している。

二、天狗として語られる覚鑿

『撰集抄』と『元亨釈書』に記された覚鑿の説話は、不動明王化現を中心に展開したものであるが、それより少し時代が下ると、室町時代に成立した南北朝を舞台にした『太平記』では、金剛峯寺による襲撃事件に関して以前に成立した説話と異なる内容が語られる。『太平記』巻第十八「伝法院の事」において、まず後醍醐天皇の吉野行幸を記した。後醍醐天皇が吉野に行幸した際、近国の軍勢及び諸寺諸社が院に従い、軍用を支え、或いは祈祷を修する。しかし、根来の大衆のみ誰一人も院のところへ参らなかつた。ただ、それは武家を恐れるため公家に背いたのではない。根来が後醍醐天皇に対して不満を抱えたのは、天皇が高野山（金剛峯寺）を崇敬し、所領

を寄付したからだと解釈される。即ち、根来の大衆が天皇のもとへ参らなかつた理由は、高野山との不和にあると説明されていた。

『太平記』に語られる後醍醐天皇の高野山への崇敬とは、莊園をめぐる金剛峯寺と大伝法院の相論に関する後醍醐天皇の勅裁を指しているのだと考えられる。元弘三年（一一三三）、金剛峯寺が改めて高野山領の四至範圍を主張した。その主張に対し、後醍醐天皇が綸旨を下した⁽¹⁰⁾。後醍醐天皇による勅裁の結果、紀ノ川の南にある相賀莊と澁田莊が大伝法院領から金剛峯寺領となった。そのような背景をもとにし、『太平記』の高野山と根来の話が展開され、更に両寺不和の最初の原因を覚鑿に結集した。『太平記』では、覚鑿の高野離山について、次のように記している⁽¹¹⁾。

中比高野の伝法院に、覚鑿とて一人の上人御座しけり。一度三密瑜伽の道場に入りしより、永く四曼分離の行業に懈らず、觀法座闌にして薰修年久しかりけるが、即身成仏と談じながら、なほ有漏の身を替へざる事を歎いて、求聞持の法を七度まで行ひ玉ふ。
(中略) ここに我慢邪慢の大天狗ども、如何かしてこの人の心中に依託して、不退の行学を妨げんとしけれども、上人の定力堅固なりければ、隙を伺ふ事

を得ず。されどもある時上人温室に入つて、瘡をたでられけるが、心身快くしてわづかの楽しみに姪着す。天狗ども、この時力を得て、造作魔の心をぞ付けたりける。これより覚鑿伝法院を建立して、我が門徒を置かばやと思ふ心懇になりければ、鳥羽禪定法皇に奏聞を経て、堂舎を立て僧坊を作らる。されば、一院の草創不日に事なりし後、覚鑿上人たちまちに入定の樞を閉ちて、慈尊の出世五十六億七千万才の暁を待ち給ふ。高野の衆徒等これを聞いて、「何条その御房我慢の心にて堀埋まれ、高祖大師の御入定に同じからんとすべき様やある。その儀ならば一院を破却せよ」とて、伝法院へ押し寄せ、堂舎を焼き払ひ、御廟を掘り破つて、これを見るに、上人は不動明王の形像にて、伽楼羅炎の内に座し玉へり。ある若大衆一人走り寄りて、これを引き立てんとするに、その身盤石の如くにして、那羅延が力も動かしがたく、金剛の杵も砕きがたく見えたりける。悪僧等なほこれにも恐れず、「あな事々し。如何なる古狸・古狐なりとも、ばくる程ならばこれにや劣るべき。よしよし真の不動か、覚鑿がばけたる形か、打つて見よ」とて、大なる石を拾ひかけて、十方よりこれを打つに、投ぐる飛礫の声、大日の真言に聞

えて、かつてその身に中らず、微塵に碎けさる。覚
鏝、この時、「さればこそ汝等が打つところの飛礫
全く我が身に中る事あるべからず」と少し嬌慢の心
を起されければ、一の飛礫上人の御額に当つて、血
の色漸んで見えたり。「さればこそ」とて、大衆ども、
同音にどつと笑ひ、各院々谷々へぞ帰りける。これ
より覚鏝上人の門徒五百坊、心うき事に思ひて、伝
法院の御廟を根来へ移して、真言秘密の道場を立つ。
されば、その時の宿意相残つて、高野・根来の両寺、
動もすれば霍執の心を挿めり。

『太平記』に記される覚鏝の話は、『撰集抄』における
覚鏝の往生説話よりだいぶ逸脱したものである。先に述
べたこの話の背景を考えると、『太平記』における覚鏝
の話は、後醍醐天皇と金剛峯寺を擁護する立場から、そ
れと対立する大伝法院及びその祖師である覚鏝を嘲弄す
る口調で語られている。ここに留意したいのは、『太平
記』は、『撰集抄』が語る往生信仰、また『元亨釈書』
における覚鏝への称賛はみられず、天狗の妨害と覚鏝の
驕慢が強調されるところである。『撰集抄』・『元亨釈
書』・『太平記』では、修行中の覚鏝が不動明王に化現す
ることを記しているが、化現より目覚めた理由について、
『太平記』では覚鏝が天狗に造作魔の心を付けられ、驕

慢を生じてしまったという『撰集抄』と異なる話を説い
た。即ち、『太平記』の覚鏝不動明王化現説話は、天狗・
魔とともに語られるようになったものである。とこ
ろが、『元亨釈書』では、「今考鏝事無之、豈其徒諱
而不書邪」とあるように、覚鏝をめぐる不動明王化現
の話は門徒の間にそれを憚り、記録しなかった。それに
対し、「殊不_レ知是鏝之奇事也。」と表現するように、虎
関師鍊はそれを讃えるべきことであると捉える。更に
「惜乎、鏝也能入_二仏界_一、不_レ能入_二魔界_一也。然中世以
来、如_二鏝之比_一鮮矣。可_レ謂_二観成闍梨_一乎哉。」という、
覚鏝が魔界に落ちたことがなく、やがて中世以降は覚鏝
のような観成の阿闍梨は少なかったと覚鏝のことを称賛
する。虎関師鍊が不動明王化現の話の後に加えた記述か
らみると、不動明王化現を巡る覚鏝と魔の話が中世
前期から既に流布していた可能性がある。『元亨釈書』
に説かれた「魔界」は、『太平記』の「造作魔の心」・「天
狗」と同じ趣旨に基づいたものであるかどうかは、今後
更に検討する必要があるが、宗教者の修行―仏道成就を
妨害し魔界に堕ちさせる存在である天狗が中世の説話と
絵巻において多く描かれ、覚鏝をめぐる魔と天狗の
話もその一環だったのであろう。一方、覚鏝を天狗と
関連付けた最初の記録は藤原忠実の言談を筆録する『中

外抄』にある。⁽¹⁾

仁平四年三月十四日。夜候御前。

小松殿。于時前出
羽守泰盛候御前

御物語

之次、仰云、「先年高野覺鏝上人ヲハ、院已下殊帰依。

仍三条北、万里小路乃西。清隆卿宅ニ居シ。件清隆

家ニて見ムトテ。召て、於上達部坐逢之。暫心をし

つめてみしニ、とひの尾の尾羽さしけたるにて見へ

しかハ、かゝる物にこそありけりとて。其後ハ不召。

定而遂有事て社弘高野了」。

仁平四年（一一五四）三月十四日の夜、忠実は以前覺

鏝と対面した時の記憶を話した。忠実は、覺鏝の正体が

「とひ（鳶）の尾羽」あるもの、即ち天狗であることを

語った。そして、忠実は天狗である覺鏝が高野より追い

出されたことまで説いたのだ。『中外抄』においては、

不動明王化現の話がみられないが、覺鏝が高野山から離

れた理由は「天狗」としての始末であつたと語られる。

『太平記』の記述は『中外抄』から直接影響を受けたと

はいえないが、魔界に落ちて高野山より追い出されたと

ころに類似性がみられる。また、『中外抄』における覺

鏝と天狗の話は、中世においてはある程度広がっていた

ことが次に提示する栄海撰『儼避羅鈔』よりうかがわれ

る。⁽¹⁵⁾

嘉暦元年十一月廿三日夜夢相、於^二或所^一天狗集会

不^レ知^二其数^一。望^二虚空^一黒雲^レ霧^レ亂、暴風^レ騒動、宛如

二^レ焼亡^一歟。黒雲^レ隙雷^レ光如^レ吐^レ炎。彼天狗中有^二主人

一、覺^二上人^一也。（中略）予对^二上人^一問^二宗秘密^一云、

一印^二二明^一、一印^二一明^一、小野流有^二異説^一、以^レ何可^レ

為^二深秘^一乎。（後略）

同廿四日、夜夢故定乘法印開^二旧記^一云、此御記知

足院殿御記也。覺^二上人^一天狗之由所^レ見也云々。即披

レ^レ記令^レ見^レ予、即覺了。先年於^二関東^一覽^二彼記^一、

外記^レ記以^二知足院殿仰^一記^レ之。彼記中^二、^二上人

天狗之由被^レ仰、有^二種々御物語^一之由記^レ之、今夢

符合、不可思議事也。

嘉暦元年（一一三二）十一月二三の夜、栄海が夢の中

に天狗姿の覺鏝と出会い、真言密教の印明に関して問答

を行った。翌日の夢に、故定乘法印が栄海に知足院（藤

原忠実）の御記（『中外抄』）の中にある覺鏝は天狗であ

る記述を披見した。栄海は夢から覚めた後、先年関東に

おいて知足院の御記を實際に見たことがあり、覺鏝と天

狗をめぐって種々の物語があることを書き加えた。栄海

が覺鏝は天狗である夢を記したのは嘉暦元年（一一三二

六）であり、『元亨釈書』の作成と近い時期である。覺

鏝をめぐる「天狗」、また「魔」と関わる話が十四世紀

半ばより以前に流布していた可能性がうかがわれる。ま

た、栄海が著した『真言伝』や『杲宝入壇記』などにおいて、天狗は魔界のものとして捉えられ、僧の修行を邪魔するような存在であると認識されている。¹⁶⁾ その点は、『太平記』に記される天狗像と近いである。『撰集抄』とその後¹⁷⁾に成立した『元亨釈書』や『太平記』では、趣旨は異なるものの、覚鑿は攻撃を受けて定を覚ましたものとして同様に語られていた。つまり、十三世紀後半から十四世紀の前半にかけ、覚鑿をめぐる不動明王化現の説話は、攻撃を受け高野山を去り、更に魔界と関わる覚鑿の話として語られていた可能性が高いだろう。

三、身代わり不動へ

『撰集抄』をはじめとして記した金剛峯寺衆徒が籠居中の覚鑿を襲撃する話の中、不動明王に化現した覚鑿が攻撃を受けて定より覚めたという覚鑿が主体とする不思議な話が物語られる。一方、そのような話は覚鑿の法流の外部に語られたものであり、大伝法院側（根来側）においてその話をどのように受け止めていたのか、またどのような形で流布させたのかについて考察を加えたい。籠居中の覚鑿を受けた金剛峯寺衆徒の襲撃、また覚鑿の高野離山について、大伝法院側で成立した『靈瑞縁起』に詳しい記述がないが、十四世紀末の成立とされる『密

厳上人縁起』において、その事件について次のように記している。¹⁸⁾

長承三年四年ノ比ヨリ、上人ハ密厳院ニ籠居シテ、偏ニ入定ノ前相ヲ修給ヘリ。（中略）依レ之金剛峯寺ノ衆成テ偏執一。群議云、於ニ高野山ニ弘法大師之御入定、既天下無双之奇特、海内無ニ之勝事也。覚鑿上人建ニ大伝法院ニ竝ニ金剛峯寺一、造ニ禪堂ニ擬ニ奥院大師入定一、而待ニ龍花之三庭一。覚座禪而期ニ慈尊之下生一、毎レ事相ニ竝大師一、擬修ニ入定一。然者早率ニ大勢一、乱ニ入密厳院一。奉レ祈引ニ出上人一、可レ妨ニ入定一云。（中略）

保延六年^{康中、于レ時}十二月七日、金剛峯寺衆徒企ニ蜂起一。召ニ上政所所司等一。同八日早朝ニ打ニ入密厳院一、欲レ奉レ追ニ出上人一之処。入ニ内陣一見ニ廻ルニ堂内一、上人更ニ不見給一。壇上ニ自体之不動尊ニ体、相竝ニ同座シテ御ス。乱入之悪僧共迷惑シテ、何ヲ本尊トモ、何レヲ上人トモ実否更難レ知。爰或悪僧云、本尊不動ハ木像、上人ハ肉身也。撤レ膝血ノ出シテ上人ト可レ知。矢ノ根ヲ拔テ、二体ノ不動ノ御膝ヲ撒奉処ニ、二体共ニ血出^{ナリ}、既悪僧等不レ及^レ力退出^{セリ}。上人思召、我^ハ憂目ニハ遇、御過^モ無^キ本尊ヲ憂目ニ合^セ申事ヲ悲給テ、出定^{シテ}復^ニ本身一、本ノ御貌^ニ成、密厳院ヲ出給^テ流

レ、涙直ニ根来寺ニ入給畢。

抑彼ノ不思議ナル不動明王ノ御事ハ、昔弘法大師ノ御作ニテ、東寺ノ西院ノ御本尊也。而上人東寺御住寺ノ時、御信仰ノ余ニ、美福門院ノ女人御申有テ、為本同体ニ上人御作成畢。造立ノ後、上人女院ノ御本尊ヲ返進申サレ給ヘハ、女院上人ノ御作ヲ拜見アル寸モ不替。尚御本ノ大師ノ御作モリ殊勝ニ御座アレハ本ヨリ女院ノ上人ノ御事ヲ御信仰アル依テ、御本ノ御作ヲ被レ進ニ覽上人一、上人ノ御作ヲ西院ノ為ニ御本尊一、被ニ安置ケリ。其ヨリ密嚴院ニ御安置有テ、無レ懈行シ給シ御本尊也。而今度依ニ金剛峯寺ノ衆徒ノ悪行甚キニ、上人ハ奉レ離ニ彼本尊一ニモ、根来寺ニ移住シ給畢。乍レ去遂ニ御願ヲモ模ニ根来寺ニ、本尊不動明王モ入ニ住彼寺一。于レ今密嚴院ニ奉ニ安置一畢。

『密嚴上人縁起』において、覺鑊の修行の様子や後に起きた金剛峯寺衆徒の行動などを極めて詳しく述べている。『密嚴上人縁起』では「上人ハ密嚴院ニ籠居シテ、偏ニ入定ノ前相ヲ修給ヘリ」とあるように、覺鑊の密嚴院における籠居は入定の前儀としてとらえられる。そして、それは不動明王を本尊とする修法であり、覺鑊の不動明王信仰がここに反映している。更に、覺鑊の法流内に成立したものととして、『密嚴上人縁起』では『靈瑞縁起』に

みられない記述がある。即ち、覺鑊の籠居は弘法大師空海の入定の真似であると金剛峯寺に非難されるところである。ここまで、『密嚴上人縁起』における話の大大かな流れはほぼ『撰集抄』と同じである。ところが、金剛峯寺衆徒が覺鑊の僧坊に入り、二体の不動明王の膝を切るどころ、『密嚴上人縁起』において「二体共ニ血出タリ」、それを見た覺鑊上人は「我ヲ憂目ニハ遇、御過無キ本尊ヲ憂目ニ合セ申事ヲ悲給テ、出定シテ復ヘリ本身一、本ノ御貌ニ成テ、密嚴院ヲ出給テ流レ涙直ニ根来寺ニ入給畢。」というように記されている。本尊の不動明王が自分を守るため、襲撃を受けた際に血を流した。覺鑊はそれを悲しく思い、高野山より根来に移住した。ここに留意したいのは、金剛峯寺の衆徒が覺鑊を襲撃した際、『撰集抄』において覺鑊は定（不動明王化現）からさめ、終に切られたと記述されている。それに対し、『密嚴上人縁起』では、「二体共ニ血出タリ」とあるように、本尊の不動明王と覺鑊が化現した不動明王ニ体とも血が出たと語られている。『密嚴上人縁起』の記述は、『撰集抄』と『元亨釈書』と比べると、覺鑊が不動明王に化現するという不思議な話より、身代わりとなった不動明王の靈験譚として意識的に語られている。『密嚴上人縁起』では、襲撃事件の後に「抑彼ノ不思議ナル不動明王ノ御事」という、身代わり

不動明王の由来を書き加えた。即ち、覚鑿上人の身代わりをしてくれた不動明王はもともと、東寺の本尊、弘法大師空海の作である。後に、美福門院の命令で覚鑿作の不動明王像が東寺に安置され、もとの空海作の不動明王像が覚鑿の本尊として高野山密厳院に安置されるようになった。また、『密厳上人縁起』は「乍^レ去^レ遂^{ニハ}御願^{ヲモ}模^ニ根来寺^ニ、本尊不動明王^モ入^ニ住^ニ彼寺^ニ、于^レ今密厳院^ニ奉^ニ安置^ニ畢^ニ。」と記されているように、不動明王像が後に根来に移された。『密厳上人縁起』における覚鑿の不動明王化現説話は、最後に本尊不動明王像の縁起として展開されていく。

『密厳上人縁起』において、不動明王化現の話は覚鑿の根来移住のきっかけとして意識的に説かれながら、不動明王の身代わり靈験譚に変貌するところが特徴的である。覚鑿の不動明王化現から本尊の靈験譚へと話の焦点が変わっていた。『密厳上人縁起』における身代わり不動明王の話は、それ以前に成立した説話集・伝記類にはみられない【表2】¹⁹⁾。『密厳上人縁起』において覚鑿の不動明王化現の話は身代わり不動、或いは本尊不動明王の縁起と根来移住のこととともに記す理由について、当時高野山と根来における大伝法院の法流の状況【表3】²⁰⁾と合わせてみていきたい。

【表2】

	遷居	死去の尊	覚鑿入定	金剛峯寺の復興	不動明王化現	身代わり不動	根来に移住	不動明王像の縁起
内	『才上人事』 (1139)	○	×	△	×	×	×	×
内	『密厳縁起』 (1293)	○	×	△	×	×	○	×
外	『實集抄』 1256前後抄	×	○	○	○	×	○	×
外	『元亨蒙書』 (1322)	×	○	○	○	×	×	×
外	『太平記』 14世紀半ば	○	○	○	○	×	○	×
内	『密厳上人縁起』 (1394)	○	○	○	○	○	○	○

先述したように、長承元年(一一三二)高野山において鳥羽院の御願寺として大伝法院が供養された。そして大伝法院の建立とともに、根来の地に豊福寺をはじめとする寺院の造営も覚鑿によって行われた。『覚鑿聖人伝法会谈義打聞集』の記録によると、覚鑿が高野山を離れた以前、すでに高野山と根来の間を往還し、根来において談義を行ったこともある。覚鑿が根来で入滅した後、その弟子たちが高野山と根来の間を往来しながら活動を続けていた。十二世紀末から根来において貫主の伝法灌頂や毎月舍利講などが行われ、豊福寺を中心に根来の教

覺鑊の示寂後に高野山で行われた大伝法院側の年中行事を記した資料から確認できる。このように、覺鑊の在世中に寺役が移転されなかったため、『靈瑞縁起』においてこのように記したのは、頼瑜による法燈（教学）の移転を意識していたのだろう。

一方、十四世紀末から十五世紀初頭にかけて、根来において本尊仏像の再興が行われ、そして大伝法院の法燈の移転は仏宝すなわち本尊の移転をもって完了となる。高野山より根来への大伝法院法燈の移転は、世紀を超えた長い時間のなかで段階的に行われたものである。法燈の移転は教学基盤の確立、寺院組織の再構築、造堂・造像の活動が必須でありながら、自ら法流の正統性、即ち寺院の縁起及び祖師の伝記を作ることにも必要であろう。『密厳上人縁起』の成立は根来における本尊の再興・開眼供養の時期と重なっている。そのように考えると、『密厳上人縁起』のなかに語られる覺鑊の不動明王化現説話は、それ以前の一方的に妨害され、斬られて追放された覺鑊像を改変するためのものと考えられる。また、『密厳上人縁起』は不動明王像の由来と靈験を強調し、根来に継承された法流の正統性を示している。更に、元弘の莊園相論以降、根来における大伝法院側は自ら法流継続のため、在地信仰を深めることにも努力した。身代わり

不動明王説話の創成もそのような在地信仰を集めるための一環として位置づけられるだろう。

おわりに

覺鑊における不動明王化現説話を最初に記したのは『撰集抄』である。『撰集抄』に語られている話は、覺鑊の往生伝としての性格が強い。また、根来への移住を意識しながら、覺鑊への称賛と金剛峯寺側への批判を示すことより、『撰集抄』撰者の立場をうかがうことができ。更に、『撰集抄』以降に成立した『元亨釈書』と『太平記』における覺鑊に対する記述と合わせてみると、中世前期に流布していた「魔」とかかわる、或いは「天狗」としての覺鑊像を反映させている可能性が指摘できる。

そのような法流の外部に成立した覺鑊の不動明王化現説話は、後に覺鑊の法流内部に成立した『密厳上人縁起』にも取り入れられた。『密厳上人縁起』に語られる不動明王化現説話は、それ以前に流布した覺鑊像とは異なり、身代わり不動の靈験譚に変貌し、また本尊不動明王像の縁起が加えられた。それは大伝法院の法燈の移転に関連するものであり、根来における本尊再興造像供養とともに編纂された自ら法流の正統性を語るためのものである。現在の根来寺において篤く信仰されている身代わり

不動明王は、『密厳上人縁起』によって確立されたものと考えられるが、覚鑿上人の不動明王説話の系譜を尋ねると、そのもとは「魔・天狗」と深く関わる覚鑿像もあったと考えられるのである。

注

(1) 聖応が筆録した覚鑿の伝法会談義に出仕した際の記録である。

(2) 西行仮託の説話集。一二五〇年前後の十数年、もしくは

その後二十年ぐらいの間の成立とされる(『日本古典文学大辞典』岩波書店、一九八六年)。

(3) 勝又俊教『興教大師の生涯と思想』(山喜房佛書林、一九九二年)。塚田晃信『撰集抄』覚鑿上人説話について『興教大師研究論集編集委員会編』興教大師八百五十年御遠忌記念論集 興教大師覚鑿研究(春秋社、一九九二年)。那須政隆『興教大師伝』(那須政隆著作集(第四卷)法蔵館、一九九七年)。苦米地誠一『大伝法院襲撃事件と不動化現説話・覚鑿の伝記をめぐって』(『智山学報』四九(〇)、二〇〇三年三月)。

(4) 『撰集抄』をはじめとして記した金剛峯衆徒による覚鑿を襲撃する事件は、後の『密厳上人縁起』など覚鑿の伝記では保延六年(一一四〇)十二月に起きたこととされる。し

かし、苦米地誠一氏の研究によると、保延六年(一一四〇)の襲撃事件は実際に起こっていなかったのである(前掲注3 苦米地氏論文)。

(5) 【表1】の作成は、苦米地誠一氏の『興教大師覚鑿上人年譜』(ノンブル社、二〇〇二年)に参照した。

(6) 覚鑿の弟子兼海が撰じたもの。三浦章夫編『興教大師伝記史料全集 伝記』(文政堂、一九八九年)に所収される。

(7) 『靈瑞縁起』(高野山大伝法院本願靈瑞並寺家縁起)は正応五年(一二九二)、根来豊福寺の覚満によって編纂されたものである。三浦章夫編『興教大師伝記史料全集 伝記』(文政堂、一九八九年)に所収される。

(8) 撰集抄研究会編著『撰集抄全注釈 下巻』(笠間書院、二〇〇三年)。

(9) 国史大系編修会編新訂増補国史大系第三一卷『日本高僧伝要文抄 元亨積書』(吉川弘文館、二〇〇〇年)。

(10) 『賜金剛峰寺論旨案文』。川崎大師教学研究所東草集研究会編『東草集』訳註研究(大本山川崎大師平間寺、二〇一四年)に所収される。

(11) 長谷川端校注・訳Web版新編日本古典文学全集(五五)『太平記』(ネットアドバンス、二〇一一年)。

(12) 実相の理法を観照する智慧を成就すること。石田瑞磨著『例文仏教語大辞典』(小学館、一九九七年)。

(13) 阿部泰郎「中世の魔界と絵巻―『七天狗絵』とその時代―」

『中世日本の世界像』(名古屋大学出版会、二〇一八年)。

(14) 続群書類従完成会編『続群書類従第一輯下 公事部』

(八木書店、一九八八年)。「」は忠実による語りである。

(15) 仏書刊行会編纂大日本仏教全書五二『儼避羅鈔』(十四印

信秘裏書、三二五―三二六頁、仏書刊行会、一九一四年)。

(16) 佐藤愛弓「『真言伝』の世界像―各伝の繋がりから―」『中

世真言僧の言説と歴史認識』(勉誠出版、二〇一五年)。

(17) 『密厳上人縁起』(また『伝法院本願覚鑿上人縁起』) 著者

不明、貞治年間(一三六二―一三六八)以降に成立したも

のとされる(中野達慧『興教大師正伝』世相軒、一九三四)。

また、大伝法院と金剛峯寺との荘園問題から、『密厳上人

縁起』の成立は応永二年(一二九五)以降であるという指

摘もある(苦米地誠一「藤津荘と仁和寺成就院」『智山学

報』四八(〇)、一九九九年三月)。

(18) 三浦章夫編『興教大師伝記史料全集 伝記』(文政堂、一

九八九年)に所収される。

(19) 【表2】において、「○」は記事あり、「×」は記事なし、

「△」は乱入騒動が記されたが、覚鑿への襲撃はなし。「内」

は大伝法院法流内で成立するもの、「外」は法流外で成立

するものである。

(20) 【表3】の作成は、中川委紀子「中世後期における高野山

大伝法院の再構築―末寺根来寺への仏宝移転相承とその観

念―(山岸常人編『歴史のなかの根来寺』勉誠出版、二

〇一七年)に参照した。

(21) 『十住心論愚草』(真福寺蔵)、『釈論愚草』・『烏瑟沙摩法』

(金剛寺蔵)など、真福寺と金剛寺をはじめとする寺院聖

教より確認できる。

(22) 阿部泰郎(編)・牧野淳司(執筆)『中世唱導資料―寺

役転輪集』(名古屋大学比較人文学研究年報別冊、二〇〇

三年)。

(23) 中川委紀子『根来寺を解く』(朝日新聞出版、二〇一四年)。

(かく・かねい/名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テ

クスト学研究センター研究員)